



『三月三日の風』の授業感想（12月3日実施）

簡単に言えば、金持ちが貧乏人を見下しているのと一緒に、そのような肩書があるだけで、見下すということをして面白がっているから、今も部落差別が続くのだと思いました。私は、差別していないけど、偏見はしている？ある？んですが、でも、偏見にとらわれずに、まず、一度そのことについてちゃんと知ってから発言しようと思いました。理由は、一人でも偏見を無くせば、差別がなくなり、そして、いじめもなくなるのじゃないかなと思ったからです。だから、まずは自分から偏見を無くさないと思いました。

部落差別もそうだけど、いじめとかも、話し合いとかでは解決できないと思いました。話し合いとかではなくて、意識から変えていかないといけないなと思いました。また、その意識とかもあっても、一人だと出来ないから「おかしい」と思ったら、声を上げないといけないと思った。また、部落の話では、そんなにすごい技術を持っているのに、認めてもらえず、まわりから変な目で見られたりしているのは最悪だなと思いました。私も、無意識のうちに、差別的な発言をしているかもしれないから、発言の一つ一つに責任を持てるようになるようにしたいです。

現在の人は、実際、天変地異だとかケガレとかは気にしていないだろうけど、ただ何となく、あの人たちは良くない人と思い込んでいるんだと思う。そういった思い込みは、昔の差別が長い時間を超えて色々な人に広まり、その中でさまざまな妄想が加えられているのだと思う。

身のまわりや世界にはたくさんの差別や理不尽なことがあるんだと改めて分かった。部落差別がなくなるのは、「おかしい」や「ダメなこと」だと気づく人が少ないのと、気づいたとしても、自分には関係ないと思う人や無くそうと行動する人が少ない、いないからだと思う。自分はまだ差別をなくそうと行動しても影響が少ないかもしれない。だからこそ、周りにあるイジメなどをなくす、止めるなど自分が今できる行動をしていきたいと思った。

当時、解放令が出された時は、それまでの偏見とかがもちろんあって、「あいつらと同じとか嫌」とか受け入れられない、認められない人が多くいたと思うし、それが先生や親、近所の人か

ら子へ受けつがれ、偏見や自分らより下の存在という意識が残ってしまったのかなと思う。小さい頃から周りがみんなそうだと、それが当たり前になって大人になっても残るんだろうし、罪の意識もあまり無いんだろうなと感じました。誰かが声を大にして、言い続けないと、その考え方が消えることはないだろうなと思いました。

差別をしている人たちは差別が怖くて仕方がないから、差別をして、自分を守ろうとしているのだと思う。差別をしていれば、周りから強く見えるし、そんな人たちを差別しようという気にもなれないから続いている。

自分の勝手な固定観念から差別が続き、生まれるからだと思いました。他にも、現代では誰もおかしいことに「おかしい！」と言えずに、声を上げる人が少ないから。世の中（社会）の雰囲気

に問題があると感じました。

カエルを助けていて、清兵衛は優しい人なのに、差別を受けているのが悲しいと思った。京都や東京へ行ったり、自分から行動して生活を良くしようとしているのに、どこの環境でも否定されていて悲しいと思った。差別で良い暮らしをしている人たちが、差別をやめないんだろうなと思った。自分が差別されていることを認め、諦めている人がいることが悲しかった。差別がトラウマになり、好きなことや夢をあきらめないといけないことが悲しかった。

自分の中にある偏見に気づき、その偏見を無くさないと思った人、また、部落差別やイジメは意識から変えないといけないと思った人。なかなか一人だと「おかしい！」と声を上げることが難しいという感想もありました。

しかし、差別やイジメを「受けている側」が声を上げなければいけないのではありません。また、「声を上げたくてもあげられないこと」（叫ぶことができないこと）はわかりますよね。

では、声を上げることができるのは誰ですか。それは、「自分は差別をしない」「差別はしてはいけない」ので、「自分とは関係がない！」「自分のまわりには（差別やイジメは）無い！」と思っている「わたしたち」ですよね。

また、「差別はいけない！」「差別は許されない！」という気持ちを持っていても、実は自分の気持ちの中にも、「〇〇に見られたくない」「△△と同じは嫌」という気持ちはありませんか。なぜ、自分は「〇〇のままではいけないのか」「△△と同じだと嫌なのか」を考えましょう。

みんなが「ありのままの自分」、「本音」を出せるためには、自分には何ができますか。